北魏末期の爾朱栄

小島典子

はじめに
一　爾朱氏と「北人」
　1　爾朱氏とは
　2　「北人」について
二　爾朱栄と爾朱栄集団の活躍
　1　爾朱栄の生涯
　2　爾朱栄集団の活躍
三　爾朱栄集団の構成と歴史的存在意義
　1　爾朱栄集団の構成
　2　爾朱栄集団の歴史的存在意義
おわりに

はじめに

後漢末期より北方民族の中国移住が始まり、五胡十六国時代は彼等の王朝が乱立した。北魏を建国した拓抜氏も鮮卑であり、北方民族は重要視されるべきである。また北方民族と漢人の融和の問題も避けては通れない。

谷川道雄氏は五胡十六国、北朝時代を「先隋唐時代」としてとらえ、隋唐帝国の「原基体ともいうべき社会形態が存在するのではないか」と独自の史観を展開し、また「北魏末の内乱は、胡漢それぞれにおいて自由をめざす一大潮流であったのである。」として六鎮の乱の目的を門閥主義の克服に求め、北方民族と漢人の融和の方向性を示唆する。[1] また直江直子氏は「北朝後期政権に継続する北族社会の基礎構造の分析は、谷川氏の論の不足を補いその再検討を行うものである」として、北方民族の社会形態を検証する。[2] 一方、川本芳昭氏は「(谷川、直江) 両氏が描かれている北魏～北朝末の社会の全体像を私が抱いているイメージと重ね合わせるとき微妙なズレを感じもするのである。それは端的に言えば、私が当該時代における部族制の伝統を両氏に比してより一層重視するのに対し、両氏が留保をつけながらも、部族制の消滅、胡漢を通じての豪族共同体の出現を重視されることによって生じて来ていると思われる。[3]」と述べ、北魏全般を通じて部族制の伝統を重視する。谷川、川本両氏の北魏の北方民族の社会形態に対する見解は齟齬を生じている。しかし従来の研究でも、いまだこの問題に対する定見はない。

北魏末期の権力者の爾朱栄は契胡出身の武人で、六鎮の乱の鎮圧者でもある。本稿では北魏末期の北方民族の姿を体現する者として爾朱栄を取り上げ、隋唐帝国への大きな時代の流れの中における彼の果たした役割や北魏末期の北方民族の社会形態を考察する。

一　爾朱氏と「北人」

1　爾朱氏とは

『魏書』巻七十四爾朱栄伝に次のようにある。

爾朱栄は、字は天宝といい、北秀容の人である。その祖先が爾朱川に住んでいたので爾朱を氏とした。常に部落を領有し、代々酋帥であった。高祖の羽健は、登国の初めに領民酋長となり、契胡の武士千七百人を率いて拓拔珪に従い晋陽を平らげ、中山を定めた。功を論じて散騎常侍の官を授けられた。秀容川に居住しているので、詔して三百里四方の土地を割譲して封ぜられ、長らく世業とした。……羽健は世祖の時に死んだ。曽祖の鬱徳、祖の代勤は、継いで領民酋長となった。代勤は世祖の敬哀皇后の舅であった。外親でありしばしば征伐においても功があったので、百年分の租税賦役を免除され、立義将軍に除せられた。……高宗の末、寧南将軍を仮授され、肆州刺史に除せられた。高祖は梁郡公を賜爵した。年老いたので官職を辞すると、毎年絹百匹の授与を定例とした。九十一歳で死んだ。……鎮南将軍、并州刺史を追贈され、諡を荘といった。……父の新興は、太和中、酋長を継いだ。……牛羊駝馬は種別に群れを作り、谷の数で数えるほどの多さであった。朝廷に征討がある毎に私馬を献上し、その上資材と食糧を用意し、戦の費用を援助し補った。高祖はこれを喜び、右将軍、光禄大夫に除せられた。洛陽遷都の後には、特に冬に参内し、夏は部落に帰ることを許された。参内する度に、諸王公や朝貴は珍しい物を送り、新興はまた名馬でお返しをした。散騎常侍、平北将軍、秀容第一領民酋長にうつった。新興は毎年春と秋に二回、常に妻子と共に川沢で家畜を飼っているのを閲し、射猟して自ら楽しんだ。粛宗の世に、年老いたので爵位を栄に譲りたいと申し上げ、朝廷はこれを許した。正光中に七十四歳で死んだ。散騎常侍、平北将軍、恒州刺史を追贈され、諡を簡といった。[4]

爾朱氏は匈奴系の契胡[5]という異民族で遊牧を生業とする。太祖道武帝の時すでに北魏に帰順しており、登国の初めより領民酋長を世襲し、山西省北部に土地を与えられ、爾朱栄の代になっても牧畜で生計を立てた。爾朱代勤は帝室の外戚にもなっており、裕福であった。軍事方面で代々大いに北魏国家に貢献し、遊牧民族特有の勇猛果敢な性質も失っていない。爾朱氏のような人達が北魏末期に至っても山西省に居住していたという史実に筆者は特に注目する。

2　「北人」について

「北人」とは一般に鮮卑をはじめとする北方民族と理解されている。『魏書』には他に「国人」とか「代人」ともいい、この三者の持つニュアンスは微妙に異なるが、本稿では北魏領域内で漢人と雑居していた北方民族を指す言葉を「北人」で統一する。北人は遊牧民族出身であり、農耕民族である漢人とは話す言葉も生活習慣も風俗も異にしている。彼等は北魏領域内に来た時の状態で雑居したのか。雑居状態は後漢末より始まり、唐の建国まで約四百年、北魏時代だけでも百五十年近くにわたる。結論から言えば、この間北人と漢人は相互に影響しあい、又婚姻も含めて漸次融和を進めていった。直江氏は「胡漢

融合の結果生み出された隋唐帝国[6]、宮崎市定氏は「素朴な異民族が中国化し、素朴と文明の調和した新人によってつくり出される社会[7]」、唐長孺氏は「『五胡乱華』と拓拔の北方入拠以後、とても多くの部落や氏族が前後して漢族に同化し、中古期間の漢族を形成し、鮮卑等各族は大融合した[8]。」と述べる。筆者は、北人と漢人の融和の結果生まれた隋唐帝国を「新しい中国」、それを形成した人達を「新しい中国人」と考える。「新しい中国人」が唐帝国を形成し、絢爛たる文化を花開かせたのである。唐帝国のコスモポリタンな性格を見るに、「新しい中国人」の形成がおよぼした影響は看過できない。

この北人と漢人との融和は、川本氏も「当時の北方民族の移住はそれまでの漢民族のあり方を変容させたという面をも濃厚にもつのである[9]。」と論じるように、漢化という一方的な方向で語ってはならない。当時の状況を推察するに、文化水準は圧倒的に漢人の方が高かった故に漢化の方に目を奪われるが、武力では北人が漢人を凌駕する。

北人と漢人の人口比率について田村実造氏は、「統計の数字から見ると、前燕時代華北の漢人と五胡族との人口比率はほぼ二・五対一ないし、三対一ということになるが、その社会上・政治上における力関係は五胡族の方がはるかに上まっていたであろう[10]。」と言う。また宮崎氏は、「晋代にはいって、……当時中国内地に放牧している異民族は単に山西省地方の匈奴ばかりでなく、西方のチベット系民族の氐、羌などは陝西地方にはいりこんでその人口は中国人とあいなかばするにいたった[11]。」と述べる。両者の意見から北魏時代を推定するに、やはり人口比率は田村氏の言う前燕時代よりあまり変動がないであろう。平和な時代に人口は増え、戦乱の時に人口は激減したが、平和の恩恵や戦禍の被害が特に北人と漢人のいずれかが偏って被ったとは史料に見えない。また大量の北人が漢北に去ったという史料もない。鮮卑系の拓拔族が建てた北魏領域内は初期は北人達にとって住みやすかった。次第に北魏が中原国家に変貌するにつれ、彼等の大多数の待遇は悪化して居住地も北鎮におしやられ、その不満の爆発が第二章第一節で述べる六鎮の乱となる[12]。北魏末期に至っても北人は軍事力や人口の上では漢人にとって脅威となる存在であり、両者の力が相拮抗するなかで「新しい中国人」への融和が長い時間をかけて徐々に進んだ。

二　爾朱栄と爾朱栄集団の活躍

1　爾朱栄の生涯

父新興を継いだ爾朱栄は、直寝、游撃将軍に除せられた[13]。正光五年（五二四）三月に六鎮の乱が勃発し[14]、戦火は北魏全体に広がる。同年八月に「鎮民解放の詔」が下されたが[15]、一向に反乱はおさまらなかった。この史実は急速に漢化していく中央政府から取り残された北鎮居住者の不満がいかに大きいかを物語る[16]。爾朱栄は逆徒を次々と平定して頭角を現わしたが、武泰元年（五二八）二月、霊太后との間に不和を生じていた粛宗が十九歳の若さで急逝した。同年四月に粛宗の死に懐疑の念を抱いた爾朱栄は孝荘帝を擁立し、この時太原王に封ぜられている。その後爾朱栄は河陰の変をおこす[17]。この事件により、爾朱栄は当時の朝廷で幅をきかせていた帝室である元氏一族、そして高祖孝

文帝の姓族分定の枠に入れた漢人や北人系の貴族の大半を一掃し、朝廷の実権を完全に掌握した[18]。同年九月に、爾朱栄は葛栄を滏口で破り[19]、六鎮の乱（五二四～五二八）を四年がかりで鎮圧する。洛陽の中央政府は脆弱化しており、もはやこの反乱をおさめる力はなかった。永安二年（五二九）には北海王顥の南奔事件をおさめ、その功により食邑は二十万戸に増封されて天柱大将軍の称号を与えられ、北魏随一の権力者の地位を極めた。「爾朱栄伝」に記載されたこの頃の爾朱栄の専権ぶりを物語るエピソードを以下に挙げる。

> 或いは幸いにして官職を求める者があれば、皆爾朱栄の所にやって来て御機嫌を伺い、願い請うことができれば、成し遂げられないものはなかった[20]。

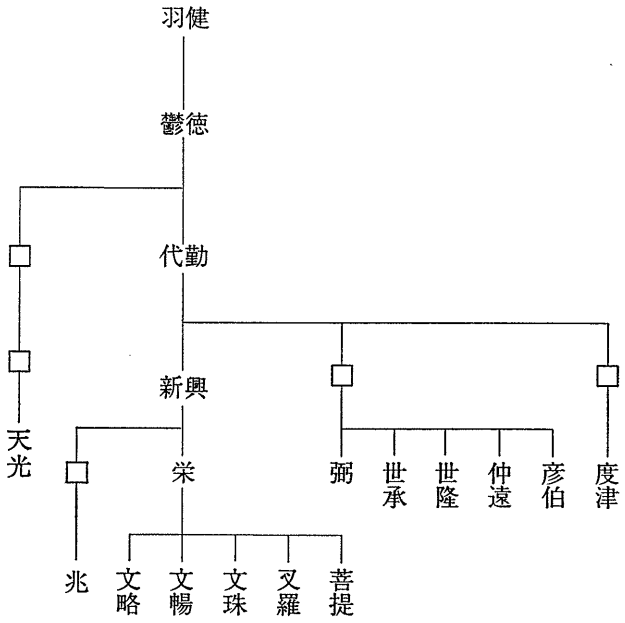
とあり、人事も好き放題に行っており、自分の思い通りにならないと、

> 天子は誰のおかげで即位できたのか、今どうして私の言葉を用いないのか[21]。

と言い出す始末であった。また、

> 爾朱栄の使者が洛陽にやって来ると、また彼の身分が卑しいにもかかわらず、朝廷の貴い人は会うに低姿勢でなびかない者はなかった。宮門の下に至るに及び、まだ上奏できないとなると、栄の威勢をたのみとして、はなはだ怒った[22]。

とあり、使者ですらこの様な態度であった。その横暴は目に余るものがあり、永安三年（五三〇）九月に城陽王徽や侍中李彧と共謀した孝荘帝に誅殺される。



爾朱氏の系図

2　爾朱栄集団の活躍

爾朱栄の率いた集団を「爾朱栄集団」と名付ける。爾朱栄死後の一族の行動は早かった。十月に長広王曄を擁立、十二月に孝荘帝を殺害し、爾朱氏は政権の中枢に再び返り咲く[23]。さらに建明二年（五三一）二月、前廃帝に禅譲させた。孝荘帝の治世が爾朱栄の傀儡政権であるのと同様、前廃帝の治世は世隆、兆、天光、仲遠、度律等の傀儡政権である（系図参照）。彼等の専横は爾朱栄に負けず劣らずで、『魏書』巻七十五爾朱仲遠伝に、

> 時に天光は関西に控え、仲遠は大梁におり、兆は并州により、世

隆は洛陽に居し、各自勝手気ままにふるまい、他に権威があり強い者はいなかった。[24]

とある様な状態で、次第に人心は離れて行った。

普泰元年（五三一）六月に爾朱栄の部下であった高歓が起兵する。[25]十月に高歓は後廃帝を擁立、中興二年（五三二）閏月に爾朱天光等四胡を韓陵で大破、同年四月に出帝を擁立した。永熙二年（五三三）正月の赤洪嶺における爾朱兆の大敗により、爾朱氏の時代は終わり、その後爾朱氏は部下の斛斯椿等の裏切りにあい滅びる。[26]また国内の反乱や南梁軍討伐も高歓によって行われ、出帝の治世は高歓の傀儡政権になるものと思われた。

しかし斛斯椿に脅された出帝は永熙三年（五三四）七月に長安の宇文泰のもとに奔る。[27]宇文泰も爾朱栄配下の武将である。高歓は出帝を迎えにいくが目的を果たせずして洛陽に帰り、今度は孝静帝を擁立した。[28]ついに北魏は高歓と宇文泰に二分され、東西に分裂する。東魏は高歓の、西魏は宇文泰の傀儡政権であったが両者共に長くは続かなかった。東魏は西暦五五〇年に北斉に、西魏は同五五七年に北周に取って代わられ、北朝に新しい王朝が二つ誕生した。爾朱栄自身は河陰の変の時に帝位に即こうとして果せなかったが、彼の部下であった高歓と宇文泰が各自王朝を建て、拓跋王朝を滅ぼした。

三　爾朱榮集団の構成と歴史的存在意義

1　爾朱栄集団の構成

爾朱栄集団は爾朱氏一族と爾朱栄の部下で構成される。帝室の疎属である上党王天穆はそのどちらにも属さず、栄と朝廷のパイプ役をつとめた。栄と天穆は同盟関係で結ばれており、[29]天穆は爾朱栄集団の中では別格の存在である。

次に爾朱氏一族であるが、彼等は爾朱栄と固い血縁の絆で結ばれていた。領民酋長の称号を持った爾朱栄のもとで部族制度を保持して遊牧生活を送っていたが、戦争開始により部落がそのまま爾朱栄集団の原形となった。これは戦時共同体的な色彩が濃厚な遊牧民族の部落組織においてよくみられることである。

最後に爾朱氏以外の栄の部下に目を向けると、まず栄の腹心の部下としては、朱瑞、叱列延慶、斛斯椿、賈頭度・智兄弟、賀拔勝・岳兄弟、侯莫陳悦、侯淵等が挙げられる。樊子鵠は荊州の蛮酋の子孫であるが、[30]他は北人である。[31]六鎮の乱により流れ着いて来たのを爾朱栄がとりたてた。『魏書』に記された古参の部下はこの十人であるが、爾朱栄集団には高歓と宇文泰という大物も属していた。[32]高歓ははじめ杜洛周のもとにいたが、葛栄のところに逃げた後爾朱栄に亡帰した。[33]宇文泰は鮮于修礼の軍にいたが、葛栄の修礼殺害の後は葛栄にとりたてられ、六鎮の乱平定後は爾朱栄の勢力下に入った。[34]彼等の活躍は以下の史料に見える。

『北斉書』巻一神武紀上

常に栄の帳内にいた。栄はかつて左右の者に「一日私がいなかったら、誰が軍を統べることができるか。」と尋ねた。皆爾朱兆を挙げた。栄は「兆はまさに三千騎を統べて還ることはできる、私に代わって人々を統べる任にあたることができる者は高歓ひとりだけである。」と言った。[35]

『周書』巻一文帝紀上

宇文泰は賀拔岳と旧交があり、そこで別将として岳に従った。

……太昌元年、岳は関西大行台となり、宇文泰を左丞、領岳府司馬とし、散騎常侍を加えた。事の大小の区別無く、皆決定を宇文泰に委ねた。[36]

高歓は爾朱栄の、宇文泰は賀拔岳の部下となり、両者共に信任は厚かった。『北斉書』や『周書』には、北魏末期に爾朱栄集団に属してその後高歓や宇文泰の部下になった者が多く見られ、その数はざっと見た限りでも百余人にのぼる。例を挙げると、厙狄干は朔方に住んでいたが、六鎮の乱勃発後軍主として爾朱栄の入洛に従い後に高歓の起兵に従った。[37] また趙貴は武川を鎮戍していたが、六鎮の乱の際爾朱栄の別将となり後に賀拔岳の遺臣を統べて宇文泰を迎えた。[38] その他、司馬子如は爾朱栄の部下のなかでは珍しく漢人であり、後に高歓の功臣となる。[39] 北斉や北周の功臣以外の者をも含めると、爾朱栄集団は個人の私兵集団とはいえ規模は大きかった。

爾朱栄が巨大な私兵集団を擁するに至った所以は何に求めればよいのか。まず第一に挙げられるのは「爾朱栄伝」に、

牛羊駝馬は、色別に群れを作り、谷の数で数えるしかないほどの多さであった。[40]

とあるほどの爾朱氏の所有する財力である。史料に、

「爾朱栄伝」

正光中、天下に戦が起こり、かくて家畜を散じて義勇を求め、衣服や馬を与えた。[41]

『魏書』巻八十侯淵伝

粛宗の末年、六鎮は飢え乱れ、侯淵は杜洛周に従って南を寇掠した。後に妻の兄の念賢と洛周に背き爾朱栄のもとに身をよせた。途中寇難に遭い、破れた粗末な衣服を身にまとっていた、栄は彼に衣服や帽子を与えて厚くもてなし、淵を中軍都督とした。[42]

とあり、六鎮の乱勃発後直ちに兵を募る爾朱栄のもとに人々は集まる。住む家を失った彼等にとって栄の支給する衣服や馬は魅力的であった。しかし爾朱栄は財力のみにより多くの人達を長期にわたって引き付けたのではない。第二に挙げられるのは爾朱栄の人柄である。

『北斉書』巻二十六平鑒伝に「爾朱王命世之雄」とあり、彼等は次代を担う人と見込んで爾朱栄のもとに赴いた。もはや人心は、奢侈に心を奪われて骨抜きになった洛陽の貴族に愛想をつかし、つぎつぎと反朝廷勢力を平定する爾朱栄に集まる。

「爾朱栄伝」

栄は生まれつき狩猟を好み、寒暑に休まなかった、列囲して進むに至っては、必ず揃っていなければならず、険しく困難な道に遭っても、回避はかなわなかった、囲みから虎豹を逃がした者は死罪となった。栄の部下はとてもこれに苦しんだ。[43]

と史料に見えるように、軍隊の規律は厳しかった。その反面「爾朱栄伝」には次のようなことも記されている。

はじめに、栄が葛栄を討とうとするや、軍は襄垣に宿営し、ついに軍士を列囲し大いに猟をした。二匹の兎が馬の前に立ち、栄はそこで馬を踊らせて弓を引きしぼり、「これに当たれば葛栄を捕らえられ、当たらなければ駄目だろう。」と誓った。そうこうして弓のつる音がしたかと思うと二匹とも倒れ、三軍は皆悦んだ。[44]

普段は厳しい態度で部下に接していた爾朱栄であるが、彼等の心をつかむのもうまかった。また、

『北斉書』巻十八司馬子如伝

栄は子如が明弁でよく時事を説明できるので、しばしば使命を奉じて宮城に行かせて多く旨意を述べさせ、孝荘帝はまた彼をもてなした。[45]

とあり、爾朱栄は部下の能力を見抜いて適材適所に登用することに長けていた。同じく「爾朱栄伝」に葛栄を捕えた後の事として以下のような記載がある。

陣中で葛栄を捕え、他の衆は皆降った。栄は賊徒が多いので、もしそこで分割したら、多分疑い恐れて、或いは更に人を集めるかもしれないと思い、そこで各自好むところによって統率するので、親属は相随い好きな所に住んでよいとあまねく告げた。そういうわけで人々は悦び、すぐさま四散し、数十万の衆は一朝に散ってしまった。百里外に出るのを待って、そこではじめて道を分かち護衛して気に入った所に安置した、皆満足した。渠帥を抜擢するに能力を量って授用したので、新付の者は皆落ち着き定まった。当時の人はその処分が素早く聡いことに感服した。[46]

このようにリーダーである爾朱栄の器が大きかったので、質量ともに充実した集団を形成し維持することが可能だったのである。またそれ故に、爾朱栄の死後簡単にこの集団は分裂、崩壊する。そして第三に挙げられるのは爾朱氏一族が北魏に帰順してからも、変わらず保持した遊牧民族の生活様式と部落共同体組織である。領民酋長[47]という言葉は「爾朱栄伝」のみならず、

『周書』巻十四念賢伝

永熙中、第一領民酋長を授けられた、[48]

とあるように、『魏書』や『北斉書』や『周書』に散見できる。領民酋長一覧表を見ると領民酋長の称号は北魏の初期から存在するが、北魏末期の史料に見える者が圧倒的に多い。[49]

『北斉書』巻十九高市貴伝

爾朱栄が北魏の孝荘帝を擁立するに及び、市貴は翼戴の勲に預かった。衛将軍、光禄大夫、秀容大都督、第一領民酋長に遷り、上洛県伯を賜爵された。[50]

と記されるように、北魏末期の領民酋長は、爾朱栄に帰順したり、また帰順後手柄をたててその称号を授与された者が多い。

『周書』巻二十九高琳伝

五世祖の宗は、多くの人を率いて北魏に帰順した、第一領民酋長を授けられ、羽真氏を賜姓された。[51]

とあり、北魏初期の領民酋長は帰順した旧部落大人層に授与される称号であった。第一章第一節に引用した「爾朱栄伝」の爾朱羽健も同様である。つまり北魏末期には世襲の領民酋長と新たに爾朱栄に授与された領民酋長が混在したのである。

『北斉書』巻十七斛律平伝

爾朱栄に帰順するに及び、とても平を厚遇し、平に父の爵である第一領民酋長を継がせた。[52]

とあるように、世襲の領民酋長であってなおかつ爾朱栄の部下になった者もいる。爾朱栄は自身も世襲した領民酋長という称号を利用して爾朱栄集団をまとめたのであった。爾朱栄は北海王顥の南奔事件平定

領民酋長一覧表

時代	氏名	出自	号	理由	他の官職	史料
魏初 386 ～ 452	爾朱羽健	爾朱川→北秀容酋帥	領民酋長	帰順？	散騎常侍	G74
	高宗	高句麗人	第一領民酋長	帰順		S29
	叱列□□	代郡西部	世爲第一領民酋長	入附		S20
	侯莫陳伏頽	代人・余部諸姓	第一領民酋長			Se19
	□堕の曾祖		領民酋長		征東将軍・文城侯	墓誌
	爾朱鬱徳	北秀容	領民酋長	世襲		G74
魏中 452 ～ 515	爾朱代勤	北秀容・世祖敬哀皇后の舅	領民酋長	世襲	肆州刺史・梁郡公	G74
	劉折	太安狄那人	領民酋長			墓誌
	爾朱新興	北秀容・継爲酋長	秀容第一領民酋長	世襲・転	散騎常侍・右将軍　他	G74
	張景略の祖	燕州上谷人	第一領民酋長		驃騎大将軍・文城侯 燕州諸軍事・燕州刺史	墓誌
	劉持真	父は蔚州刺史	領民酋長		鎮遠将軍	S17
	独孤庫者	雲中人・部落大人・余部諸姓	領民酋長			S16
	斛律大那瑰	朔州勅勒部人・酋帥らしい	第一領民酋長		光禄大夫	Se17
	焦延昌の祖	北人らしい	第一領□酋長			墓誌
	乞伏周	馬邑鮮卑人	第一領民酋長		銀青光禄大夫	Z55
魏末 516 ～ 550	叱列平	代郡西部人・世爲酋帥	襲爲第一領民酋長	世襲(爾)	臨江伯	Se20
	爾朱栄	北秀容	第一領民酋長	世襲	天柱大将軍　他	G74 洛伽
	斛律金	朔州勅勒部人	第二領民酋長 第一領民酋長	軍功 軍功(高)	阜城県男 石城郡公	Se17
	万俟普	太平人・匈奴別種	第二領民酋長	帰順(爾)	河西公(高)他	Se27
	破六韓孔雀	附化人・匈奴単于の裔	第一領民酋長	帰順(爾)	平北将軍	Se27
	劉懿(貴)	秀容陽曲人	第一酋長	帰順(爾)	栄府騎兵参軍 敷城県伯→公　他	Se19 墓誌
	斛律平	朔州勅勒部人	第一領民酋長	世襲	孟都公	Se17
	高市貴	善無人	第一領民酋長	軍功(爾)	上洛県伯　他	Se19
	高歓	懐朔鎮・隊主	第三鎮人酋長 第一鎮人酋長	軍功(爾)	銅鞮伯　他	Se1
	叱列延慶	代西部人・世爲酋帥	西部第一領民酋長	軍功(爾)	永寧県開国伯他	G80 墓誌
	爾朱天光	栄従祖兄子	北秀容第一酋長	軍功(爾)		G75
	梁禦	武川人(先安定人)	第一領民酋長	軍功(爾)	白水県伯　他	S17
	叱列伏亀	代西部・部落大人	第一領民酋長	世襲		S20
	乞伏纂	馬邑鮮卑人	第一領民酋長	世襲	金紫光禄大夫	Z55
	王善来の父	西河人・懐朔鎮に関係？	第一領民酋長	(高)	前鋒□盪　他	墓誌
	王懐	北辺の出身？	第一領民酋長	帰順(高)	武周県侯　他	Se19
	薛孤延	代人	第一領民酋長	軍功(高)	永固県侯→公	Se19
	厙狄干	善無人	第一鎮民酋長	軍功(高)	広平県公→郡公	墓誌 Se15
	歩大汗薩	太安狄那人 父は領民別将	第三領民酋長	帰順(高)	江夏子(爾)・安陵県 男・長広伯(高)　他	Se20
	念賢		第一領民酋長	(宇？)	安定郡公	S14
北斉 550 ～	斛律光		第一領民酋長	世襲(高)	咸陽王・武徳郡公	Se17
	破六韓常	附化人 匈奴単于の裔	第一領民酋長	死後(高)	平陽公　他	Se27

G＝魏書　Se＝北斉書　S＝周書　Z＝隋書　洛伽＝洛陽伽藍記
アルファベットの後の数字は巻数
(爾)＝爾朱栄が領民酋長に任命　(高)＝高歓が任命　(宇)＝宇文泰が任命
尚理由の欄に上記の三種類の括弧マークの無い者は北魏朝廷に任命された者とみなす。

後自身は晋陽に戻り、「爾朱栄伝」に、

栄自身は外にいたが、つねに遙か朝廷を制御し、広く親戚を列ねて侍臣とした、朝廷の様子を伺察して必ず小も大も皆知っていた。[58]

とあるように、一族の者に朝廷を監視させた。一族や腹心の部下の次に重要視されたのが領民酋長で、彼等は爾朱栄の部下として大いに軍功をあげた者ばかりである。爾朱栄は爾朱栄集団を部落連合体に擬え、領民酋長を授与された部下や世襲の領民酋長達は集団内において有力者として待遇された。爾朱氏一族の結束を基礎として、爾朱栄集団は領民酋長をはじめとする北人の武人達に支えられ、擬似部落連合体的色彩の濃い軍事組織として時代の要請に応えて発展した。なお領民酋長の称号は、高歓も部下に与える称号として利用している。[59]

2　爾朱栄集団の歴史的存在意義

爾朱栄集団の歴史的存在意義は、「次代を担う人材の養成」、「北鎮に居住する北人の中央進出の促進」の二点である。爾朱栄集団は高歓や宇文泰のような次代を担う人達を養成して彼等に政権の中枢に進出する機会を与えた。集団の中心である爾朱氏一族についてのみみれば六鎮の乱鎮圧と孝荘帝、前廃帝擁立後の擅恣しか目につかないが、部下が爾朱氏のみならず北魏朝廷をも倒し、新たな王朝を樹立したことは大いに注目に値する。これが歴史的存在意義の第一点である。

高歓も宇文泰も爾朱栄集団内で各々腹心の部下達とめぐり会い、権力基盤を形成していった。斛律羌舉[60]や寇洛[61]に代表されるように、彼等の大半もまた北魏朝廷から疎外された北人系の北鎮居住者であり、北鎮居住者達は爾朱栄集団に入ることにより中央進出の機会を与えられた。これが歴史的存在意義の第二点である。彼等の中央進出は結果として北人と漢人の融和をより広範囲に推し進める契機となった。

北魏末期の北人と漢人の融和の進み具合については、史料に以下の記述がある。

『北斉書』巻二十一高昂伝

昂は、字は敖曹、乾の第三弟である、……又高歓の韓陵に於ける爾朱兆討伐に従い、昂は自ら王桃湯、東方老、呼延族等三千人の郷人や部曲を統領していた。高歓が、「高都督はもっぱら漢人を率いているが、恐らく事はうまくすすまないだろう、今鮮卑の兵千余人を割いて共にまじえようと思う、どうだろう。」と言ったので、昂は、「敖曹の率いる部曲は已に長期間訓練しており、前後の戦闘は、鮮卑に減色しません。今もしこれに鮮卑兵を交えれば、お互いに気持ちを合わせられず、勝てば功を争い、退けば罪を責め合うことになるでしょう。更に兵を合わせて煩わされるようなことのないよう、自分は漢軍を統領します。」と答えた。高歓はもっともであると認めた。……時に、鮮卑はみな中華の朝士を軽んじたが、ただ昂には憚り心服した。高歓は常に三軍に命令するに、鮮卑語を用いたが、昂がもし隊伍にいたならば、中国語を用いた。[62]

当時の北鎮出身の北人と漢人の間には「鮮卑人」や「漢人」という両者を区別する意識がまだ存在した。両者には北人や漢人としての確固としたアイデンティティが残存しており、意識の上で「新たな中国人」としてまだ融合されていない。このことは北鎮居住者は漢化から

とり残された人達であることに由来する。言い換えれば彼等が漢人と融和されれば「新たな中国人」の形成は大きく前進するのである。上記の史料から見るかぎり北魏末期や北斉初期にはまだ北鎮出身の北人と漢人は別個の存在で、両者の融和にはいましばらくの時間を必要とする。

おわりに

爾朱栄個人としては武人としての才能にも恵まれ華々しい功績を挙げ、その人柄とあいまって多くの北人が彼を慕い集まり爾朱栄集団を形成した。この爾朱栄集団は規模も大きかったが、高歓や宇文泰も属しており、その後の北朝の支配者二人を内包するまさに北魏の命運を左右する軍事集団であった。しかし爾朱栄は部下に司馬子如もいたが、その他漢人士大夫層と接触はなく、栄自身は漢化の影響もほとんど受けず、自分は遊牧民族の部族長であると認識していた。したがって爾朱栄集団の構造は擬似部落連合体の域を超えることはなかった。ここに爾朱氏政権の限界と短命の原因はある。[19] 武力で権力を握っても、漢人士大夫層との連携がうまくいかないと複雑な政治機構を持つ中原国家の支配者であり続けることは難しい。爾朱氏政権は五胡十六国時代の国々の姿と重なりあう。北魏末期の、漢人といまだ分離独立した意識しか持たない北人為政者の限界を体現する。北人と漢人で共に手を携えて「新しい中国」を作っていかねばならなかった北魏末期に、爾朱栄は世を託すに足る人物とみなされて一時期権勢をふるった。しかし「新しい中国人」が形成されて「新しい中国」である隋唐帝国へ向かうのは、次の北斉や北周の時代を待たなければならない。北魏末期の北人社会の状況はこのようではあったが、多くの北鎮に居住していた北人達に政権の中枢に進出する機会を与え、北人を「新しい中国人」形成へ一歩前進させた爾朱栄の功績は評価されるべきである。

註

① 谷川道雄『隋唐帝国形成史論』筑摩書房、一九七一年。
② 直江直子「北朝後期政権為政者グループの出身について」『名古屋大学東洋史研究報告』五、一九七九年。
③ 川本芳昭『魏晋南北朝時代の民族問題』汲古書院、一九九八年。
④ 爾朱栄、字天宝、北秀容人也。其先居於爾朱川、因為氏焉。常領部落、世為酋帥。高祖羽健、登国初為領民酋長、率契胡武士千七百人従駕平晋陽、定中山。論功拝散騎常侍。以居秀容川、詔割方三百里封之、長為世業。……羽健、世祖時卒。曾祖鬱徳、祖代勤、継為領民酋長。代勤、世祖敬哀皇后之舅。以外親兼数征伐有功、給復百年、除立義将軍。……高宗末、仮寧南将軍、除肆州刺史。高祖賜爵梁郡公。以老致仕、歳賜帛百匹以為常。年九十一、卒。……贈鎮南将軍、并州刺并史、謚曰荘。……父新興、太和中、継為酋長。……牛羊駝馬、色別為羣、谷量而已。朝廷毎有征討、輙献私馬、兼備資糧、助裨軍用。高祖嘉之、除右将軍、光禄大夫。及遷洛後、特聴冬朝京師、夏帰部落。毎入朝、諸王公朝貴競以珍玩遺之、新興亦報以名馬。転散騎常侍、平北将軍、秀容第一領民酋長。新興毎春秋二時、恒与妻子閲畜牧於川沢、射猟自娯。粛宗世、以年老啓求伝爵於栄、朝廷許之。正光中卒、年七十四。贈散騎常侍、平北将軍、恒州刺史、謚曰簡。
⑤ 直江前掲論文註②、川本前掲書註③、「北朝的民族問題与民族政策」（周一良『魏晋南北朝史論集』所収、中華書局、一九六三年）。
⑥ 直江前掲論文註②。
⑦ 宮崎市定『大唐帝国』（『世界の歴史七』河出書房新社、一九六八年）。
⑧ 唐長孺「拓拔族的漢化過程」（『魏晋南北朝史論叢』所収、生活・読書・新知三聯書店、一九五五年）。

⑨ 川本前掲書註③。
⑩ 田村実造『中国史上の民族移動期―五胡・北魏時代の政治と社会―』創文社、一九八五年。
⑪ 宮崎前掲書註⑦。
⑫ 内田吟風「北朝政局に於ける鮮卑・匈奴等諸北族系貴族の地位」（『北アジア史研究匈奴篇』所収、同朋舎、一九七五年）、谷川前掲書註①、直江直子「北魏の鎮人」（『史学雑誌』九二―二、一九八三年）、川本前掲書註③。
⑬ 「爾朱栄伝」
⑭ 『魏書』巻九粛宗紀。
⑮ 「粛宗紀」
⑯ 谷川前掲書註①、内田前掲論文註⑫。
⑰ 「爾朱栄伝」、『魏書』巻十孝荘紀。
⑱ 窪添慶文「河陰の変小考」（『榎博士頌寿記念東洋史論叢』所収、汲古書院、一九八八年）。
⑲ 「孝荘紀」
⑳ 或有僥倖求官者、皆詣栄承候、得其啓請、無不遂之。
㉑ 天子由誰得立、今乃不用我語。
㉒ 栄使入京、雖復微蔑、朝貴見之莫不傾靡、及至闕下、未得通奏、恃栄威勢、至乃忿怒。
㉓ 「孝荘紀」
㉔ 時天光控関右、仲遠在大梁、兆拠并州、世隆居京邑、各自専恣、権強莫比焉。
㉕ 『魏書』巻十一前廃帝紀。
㉖ 『魏書』巻八十斛斯椿伝。
㉗ 『魏書』巻十一出帝紀。
㉘ 『魏書』巻十二孝静帝紀。
㉙ 『魏書』巻十四上党王天穆伝。
㉚ 『魏書』巻八十樊子鵠伝。
㉛ 『魏書』巻八十。
㉜ 谷川前掲書註①、直江前掲論文註②。
㉝ 『北斉書』巻一神武紀上。
㉞ 『周書』巻一文帝紀上。
㉟ 常在栄帳内。栄嘗問左右曰、「一日無我、誰可主軍。」皆称爾朱兆。曰、「此正可統三千騎以還、堪代我主衆者唯賀六渾耳。」
㊱ 太祖与岳有旧、乃以別将従岳。……太昌元年、岳為関西大行台、以太祖為左丞、領岳府司馬、加散騎常侍。事無巨細、皆委決焉。
㊲ 『北斉書』巻十五厙狄干伝。
㊳ 『周書』巻十六趙貴伝。
㊴ 『北斉書』巻十八司馬子如伝。
㊵ 註④参照。
㊶ 正光中、四方兵起、遂散畜牧、招合義勇、給其衣馬。
㊷ 粛宗末年、六鎮飢乱、淵随杜洛周南寇。後与妻兄念賢背洛周帰爾朱栄。路中遇寇、身披苫褐、栄賜其衣帽、厚待之、以淵為中軍副都督。
㊸ 栄性好猟、不舎寒暑、至於列囲而進、必須斉一、雖遇阻険、不得回避、虎豹逸囲者坐死。其下甚苦之。
㊹ 初、栄之将討葛栄也、軍次襄垣、遂令軍士列囲大猟。有雙兎起於馬前、栄乃躍馬彎弓而誓之曰、「中之則擒葛栄、不中則否。」既而並応弦而殪、三軍咸悦。
㊺ 栄以子如明弁、能説時事、数遣奉使詣闕、多称旨、孝荘亦接待焉。
㊻ 於陣擒葛栄、余衆悉降。栄以賊徒既衆、若即分割、恐其疑懼、或更結聚、乃普告勒各従所楽、親属相随、任所居止。於是羣情喜悦、登即四散、数十万衆一朝散尽。待出百里之外、乃始分道押領、随便安置、咸得其宜。擢其渠帥、量力授用、新附者咸安。時人服其処分機速。
㊼ 領民酋長についての専論は、佐久間吉也「北朝の領民酋長制に就いて」（『福島大学学芸学部論集』第一輯、一九五〇年）、周一良「領民酋長与六州都督」（『魏晋南北朝史論集』所収、中華書局、一九六三年）があり、厳耕望『中国地方行政制度史』（中央研究院歴史語言研究所専刊之四十五、一九六三年）の第十四章に「領民酋長」がある。
㊽ 永熙中、拝第一領民酋長。
㊾ 直江前掲論文註⑫。
㊿ 及爾朱栄立魏荘帝、市貴預翼戴之勲。遷衛将軍、光禄大夫、秀容大都

督、第一領民酋長、賜爵上洛県伯。

㊿ 五世祖宗、率衆帰魏、拝第一領民酋長、賜姓羽真氏。

(51) 及帰爾朱栄、待之甚厚、以平襲父爵第一領民酋長。

(52) 栄身雖居外、恒遙制朝廷、広布親戚、列為左右、伺察動静、小大必知。

(53) 佐久間前掲論文註㊼。

(54) 『北斉書』巻二十斛律羌舉伝。

(55) 『周書』巻十五寇洛伝。

(56) 昂、字敖曹、乾第三弟、……又随高祖討爾朱兆於韓陵、昂自領郷人部曲王桃湯、東方老、呼延族等三千人。高祖曰、「高都督純将漢児、恐不済事、今当割鮮卑兵千余人共相参雑、於意如何。」昂対曰、「敖曹所将部曲、練習已久、前後戦闘、不減鮮卑、今若雑之、情不相合、勝則争功、退則推罪、願自領漢軍、不煩更配。」高祖然之。……于時、鮮卑共軽中華朝士、唯憚服於昂。高祖毎申令三軍、常鮮卑語、昂若在列、則為華言。

(57) 谷川道雄「北斉政治史と漢人貴族」(前掲書註①所収)、直江前掲論文註②。